

『野火』の精神症状（下）

岩 坪

さて「一八 デ・プロファンデイス」の章で幻聴が発現したが、当初幻聴だけであつた症状は本文の進行とともにより多彩になる。そこに現れる症状は精神分裂病の第一級^{（注28）}症状と呼ばれるものである。

第一級症状は、^{（注28）}考想化声・問答形式の幻聴・自己の行為に随伴して口出しする形の幻聴・身体への被影響体験^{（注29）}（作為体験^{（注29）}）・思考奪取^{（注30）}・その他の思考領域での被影響体験・思考伝播^{（注31）}・妄想知覚^{（注32）}・感情や衝動や意志の領域に現れるその他の作為、被影響体験である。このうち『野火』本文で記述されているのは、自己の行為に随伴して口出しする形の幻聴・身体への被影響体験・妄想知覚・意志の領域に現れる作為体験である。

病の過程として『野火』を見た場合「二五 光」の章は病勢憎悪に向かう転機となつている。「二二 同胞」から「二四 三叉路」では三好行雄のいうところの「連帯」が記載されるのであつて、この間田村は大島隊所属の伍長の一団と共にバロンボンへ向かうのであるが、その道で彼は安田と永松にも再会している。「一九 塩」で手にいれた塩によつて田村は社会的關係を回復するのである。のみ

ならず、田村は伍長と出会うことで「希望」（二二 同胞）すら抱くのであるが、バロンボン行きの「希望」はバロンボンへの道の要所であるオルモック街道を占拠する米軍によつて絶たれる。「二五 光」は街道突破のために田村一等兵がまた独りになる箇所である。この時田村に現れる症状は離人症であるが、ここではかなり作為体験の傾向が強くなつてゐる。左記の箇所である。

前方の湿原にも何も動く気配がなかった。何かの手違いで、みなは突破を中止したのではないだろうか、と恐怖が私を捉えた。その時前方の暗闇で音がした。飯盒と剣の触れ合うような音であつた。音に誘われるように私の足は前へ出た。

（二五 光）

ついで「死の観念」が私を訪れた後、「神の観念」としてそれ以

降で發展するきっかけとなる妄想知覚が生じる。「見られている」という感覚がそれである。この妄想知覚が妄想として發展した場合が注察妄想である。したがってこの後展開する「神の観念」は妄想である。以下はその「見られている」という妄想知覚の最初の発現の箇所である。

私は不意に心が軽く、力が湧くように思った。泥から足を抜く動作の一つ一つも、最早私にはどうでもよい、任意のものと感じた。そして早く進んでいるような気がした。

この安易な感覚に伴って、一つの奇妙な感覚が生れて来た。私は自分の動作が、誰かに見られていると思った。私は立ち止った。しかし昔もない暗闇の泥濘の中で、私を見ている者がいるはずはなかった。私はすぐ自分の錯覚を喰い、再び前進に戻った。

(二五 光) 傍点ママ

その直後に人物誤認が二度記載される。人物誤認は人物の同定の障害で、未知の人を知人と誤認したり、反対に肉親や知人を知らない人だと言ったりするものである。精神分裂病では人物誤認は妄想知覚ないし妄想着想から生ずると考えられる。ここで記載される人物誤認はどちらかというと思ひ込みに近く、特に病理学的意味付けするのも問題であるのかも知れないが、それにも関わらず指摘するのは、人物誤認が二重身・替え玉の錯覚・自己像幻視の現象領域と

関わりをもち、おそらくは「三九 死者の書」で発現する自己像幻視の症状面での伏線となっているからである。次の二箇所である。

人の吐く息が聞えた。さし延べた私の左手は前に行く者の劍鞘に触れた。思わずつかむと、その者は、

「煩せえな。附くな、附くな」

と低く鋭くいった。伍長の声だと私は思った。

(二五 光)

「やられた」

と負傷を告げる声が聞えた。

「わーっ」

と叫ぶ声が、立ち上り、前進して、途切れた。私は再びそれが伍長だと思った。

(二五 光)

街道突破の失敗の後、「二六 出現」の章で降伏を考える田村の前にゲリラの比島女性兵士が現れて、田村は「死へ向つての生活」を決意する。

「二七 火」の章では最初の幻視が現れる。

夜、なおも雨が降り続ける時、私は濃い葉簇の下を選んで横わった。既に螢の死んだ暗い野に、遠く赤い火が見えた。何の灯であらう。雨の密度の変移に従って、暗く明るくまたたき、または深い水底に沈んだように、暈だけになった。

私はその火を怖れた。私もまた私の心に、火を持っていたからである。

或る夜、火は野に動いた。萍草や禾本科植物がはびこって、人の通るはずのない湿原を貫いて、提灯ほどの高さで、揺れながら近づいて来た。

私の方へ、どんどん迫って来るように思われた。私は身を固くした。すると火は突然横に逸れ、黒い丘の線をなぞって、少しあがつてから消えた。

私は何も理解することが出来なかった。ただ怖れ、そして怒っていた。

(二七 火)

対象のない恐怖、要するに不安がこの章で描かれて、情緒の解体がはじまる。以降主人公の狂気はさらに進行する。上臍部を日本兵から「食べてもいいよ」と言われ、彼が死んだ後、剣で切り取ろうとした時、おそらくは『野火』の最も印象的な症状が「二七 手」で起こる。

私は右手で剣を抜いた。

私は誰も見てはいないことを、もう一度確めた。

その時変なことが起った。剣を持った私の右の手首を、左の手が握った。この奇妙な運動は、以来私の左手の習慣と化している。

(中略)

今では私はこの習慣に馴れ、別に不思議とも思わないが、この時は驚いた。右の手首を上から握った、その生きた左手が、自分のものでないように思われた。

私が生れてから三十年以上、日々の仕事を受け持って来た右手は、皮膚も厚く関節も太いが、甘やかされ、怠けた左手は、長くしなやかで、美しい。左手は私の肉体の中で私の最も自負している部分である。

(中略)

「汝の右手のなすことを、左手をして知らしむる勿れ」

声が聞えたのに、私は別に驚かなかった。見ている者がある以上、声ぐらい聞えても不思議はない。

声は私が殺した女の、獣の声ではなかった。村の会堂で私を呼んだ、あの上ずった巨大な声であった。

「起てよ、いざ起て……」と声は歌った。

私は起ち上った。これが私が他者により、動かされ出した初めである。

(二九 手)

幻聴が手記執筆時点の田村によって自分の声として捉えられている

ることは本論(上)において既述の通りである。したがって、この新約聖書の言葉は田村の意識から生じた幻聴である。新約聖書のマタイによる福音書6・3では、この文言はかくれて施しを行うことを垂訓したものである。また田村は幻聴に対する病識はあるが、本文内を一貫して視覚に関する異常には総じて洞察が弱いようである。右は作為体験であるが、次章の「三〇 野の百合」では軽度の意識混濁を背景として幻聴と幻視が起きてくる。

「あたし、食べてもいいわよ」

と突然その花が言った。私は飢えを意識した。その時再び私の右手と左手が別々に動いた。

手だけでなく、右半身と左半身の全体が、別もののように感じられた。飢えているのは、たしかに私の右手を含む右半身であった。

私の左半身は理解した。私はこれまで反省なく、草や木や動物を食べていたが、それ等実は、死んだ人間よりも、食べてはいけなかったのである。生きているからである。

花は依然として、そこに、陽光の中に光っていた。見凝めればなお、光り輝いて、周辺の草の緑は遠のき、霞んで行くようであった。

空からも花が降って来た。同じ形、同じ大きさの花が、後から後から、空の奥から湧くように夥しく現われて、光りながら落ちて来た。そして末は、その地上の一本の花に収斂された。

「野の百合は如何にして、育つかを思へ、勞せず紡がざるなり。今日ありて明日炉に投げ入れらるる野の草をも、神はかく装い給えば、まして汝らをや、ああ信仰うすき者よ」

声はその花の上に漏斗状に立った、花に滴たされた空間から来ると思われた。ではこれが神であった。

その空間は拡がって来た。花は燦々として、私の上にも落ちて来た。しかし私はそれが私の体に届かないのを知っていた。

この垂れ下った神の中に、私は含まれ得なかった。その巨大な体躯と大地の間で、私の体は軋んだ。

私は祈ろうとしたが、祈りは口を突いて出なかった。

(三〇) 野の百合

祈ろうとして祈りが口から出ないのは、分裂病における拒絶症の一症状であり、食べようとして食べれないという田村の症状と同じ症状である。また、ここでは右手と左手の異なった動作が妄想への発展性を示して記載されている。ところでこれらの症状の詳細は現実の裏打ちを欠いた全くの虚構ではない。直接の典拠ではないが、傍証として『現代精神医学大系』第十卷A1《精神分裂病Ia》^(註)に掲げられた症例をあげておく。

症例

「細胞分裂によって二つに割れて右と左にいった私は……すなわち右の私（本当の私でない）は素朴な私で赤ちゃんみたい。けれどそれがゴラスをし、フォークダンスをし、ドッジボールをし、絵をかく。フォークダンスするとき右の私はひろがり、たいへん軽い無責任な気持ちになって足が動く。左の私（本当の私）はダンスはしないで寝ていたいといったが、ダンスしているうちにみえなくなった……」

絵をかくときは右の私が、素直にありのままをみる。ドッジボールをするとき、左の私は、人にボールをぶつけて気楽だ。とめる。けれど右の私は、人にボールをぶつけるのはいやだと

左の私は勉強する。けれど勉強がいやだというのも左の私だ。左の私はいま弱くて、私はもの考えることも、文章をかくこともできない。

右の私が大きくなって安定している私は、無責任で気が楽だ……」
（『現代精神医学大系』第十卷A1『精神分裂病I a』）

にもかくにも、『野火』に記載された狂気が必ずしも無稽な想像力によるものでないことは大体証明できたと思う。以上説明した症状は分裂病の第一級症状であり、田村一等兵が精神分裂病を患っているように設定されていることが論文読者に理解できると思う。したがって堀井正子の狂気否定説は謬見である。

さらに補足的批判を加えれば「正名と自然——帝国軍隊における言

語と「私」において井口時男は、『野火』における「極度に内的な状態と極度に社会的な状態の不意の連接」を問題にして、田村がその「絶対に相容れないと思われる二つの状態」を「たちどころに踏み越える」ことを「自我という実体の分裂ではなく、二つの言語ゲームの相互外在性に関わる問題」に帰している。井口はこの「踏み越え」と「自我という実体の分裂」との関わりを否定しているが、実は井口の言うところの「踏み越え」は分裂病ではよく見られる。いわゆる二重見当識である。分裂病では妄想的態度と現実的態度とを使い分ける態度を取り得るのであって、これは人格の一種の解体の表徴であるとされる。井口論は言語ゲームと主人公の生き方との関わりを論じたものとして興味深い。『野火』を論じた箇所には「病」に対する洞察を欠いている。

『野火』において田村一等兵は妄想の中で見神体験に遭遇する。田村一等兵は分裂病による認識の歪みを通して、戦場の「事実」の中を彷徨し「神の観念」を希求するように設定されている。戦場の「事実」と「神の観念」の希求とを連結するテーマが「狂気」である、と本文構造上解釈することが可能であると稿者は考える。しかし小説世界の解釈は本論では行わないことにする。

以上、この論文では田村一等兵の症状と病名の特定とにほぼって論じてきた。稿者は精神医学の素人であるので、専門的知見からすれば誤りと見なされる箇所も多々あると思われる。御指摘いただければ幸いである。

(注27) [英] first rank symptom シュナイダー-Kschneiderが精神分裂病の診断の際してとくに重視されてよいものとしてあげた一連の症状。『新版精神医学事典』四三二ページ。参照注4)

(注28) [英] thought hearing, audition of thought, thought resonance 考想反響、思考化声、思考反響とも訳される。自分自身の考えが声もしくは響きとして聞えてくること。声の聞える場所は自分の内部でも外側でもよい。(参考『新版精神医学事典』二二九ページ。参照注4)。

(注29) [英] made experience させられ体験ともいう。自分の意志や思考、行為が他人の力によると感じられる体験。(参考『新版精神医学事典』二二六ページ。参照注4)

(注30) [英] thought withdrawal 自分の考えが、他人によって抜き取られてしまう、自分の考えが盗まれるというように、自分の考えが他人によって奪われてしまうという体験。『新版精神医学事典』二九五ページ。参照注4)。

(注31) [英] broadcasting of thought 考想伝播とも訳される。自分の考えが自分一人のものでなく、他人が、時には全世界がそれを知っていると感じる体験。(参考『新版精神医学事典』三三一ページ。参照注4)。

(注32) [英] interpretation-delusion, delusional percept 正常な知覚に直接的に一定の誤った意味が付与されるもの。例えば患者は、一匹の犬が直立した姿勢で自分に向って一方の前足を高くあげた。これは天の啓示にちがいないと体験する。なぜそういう意味付けしたのかは合理的にも感情的にも了解することができないが、患者は

確信している(関係妄想)。知覚は必ずしも視覚に限らず、言葉、においなど他の知覚でも同様に起こりうる。(参考『新版精神医学事典』七六九ページ。参照注4)。

(注33) [英] delusion of observation (reference) 周囲から、あるいは街中などで他人から注目されているという妄想的確信。(参考『新版精神医学事典』五四三ページ。参照注4)

(注34) [英] autochthonous idea 突然媒介なしに、自分は神である。特別な能力をもっている。迫害されているなどと思いつき、その考えを確信するもの。(参考『新版精神医学事典』七七〇ページ。参照注4)。

(注35) [英] 新版精神医学事典』四二二ページ。参照(注4)。「人物誤認」の項。

(注36) [英] autoscopy 自分自身の姿を外界に見る幻覚。一部のことも全身のことも、等身大のことも小さいことも、過去の自分や年老いた姿のこともあり、患者からの距離も一定でない。多くは一瞬ないし短時間だが、不安を伴い、疑いなく自分であるとの確信を抱く。(参考『新版精神医学事典』三〇一ページ。参照注4)。

(注37) 参考『新版精神医学事典』六九〇ページ。参照(注4)。「不安」の項。

(注38) [英] negativism 外部からの働きかけを理由なく拒否し、反抗する態度をいう。例えば、座らせようとするのに逆に立ち上がった、食欲が生じていても食事をとろうとしなかったりする。尿意や便意が生じてても排泄しようとしなかったりする場合もある。精神分裂病の緊張型によく見られるが、器質性精神障害、症状精神病、

心因性精神障害などでもみられることがある。(参考『新版精神医学事典』一七三ページ。参照注4)。

(注39) 参照(注20)。

(注40) 参照(注20)。一六三ページ

(注41) 『野火』論。参照(注2)。

(注42) 「正名と自然——帝国軍隊における言語と『私』」。初出「群像」第四七卷第十一号。一九九二年(平成四年)十一月。

(注43) 「英」double orientation 妄想などで誤った見当識(自分はなぜここにいるのか、ここはいつたどこで、いまはいつたいつなのか、どういう状況にいま自分はおかれているのか、といった自己自身についての根本的な見当づけのこと)をもちながら、正しい現実的な見当識が並存されていることをいう。二重記帳ともいわれる。(参考『新版精神医学事典』二二五・六〇〇ページ。参照注4)。

(注44) 『現代精神医学大系』第一〇巻A1《精神分裂病I a》一五三ページ。参照(注20)。